

尾張国富田荘の考古学的研究

—成願寺を中心として—

中・近世研究部会※

愛知県下の中世集落研究を進めるため、円覚寺に残る『尾張国富田荘』絵図に描かれた地域の考古学的分析を中心に検討を行った。具体的には尾張国富田荘の絵図において中心的部分と考えられる「成願寺」付近の地域についての実地踏査、地籍図の分析、地質学的検討を踏まえ、絵図に描かれた河道・道・地名・建物の地籍図における位置の推定を試みた。その結果、絵図に描かれた「成願寺」の位置をおおまかに特定するに至った。

1 目的と研究史

本センター中・近世部会では、愛知県下の中世集落研究を進めるため、平成15年度の共同研究テーマとして富田荘域における考古学的手法を中心とした総合的研究を取り上げた。このテーマ設定にはさまざまな思惑があるが、取り上げた最大の理由は富田荘には著名な『尾張国富田荘絵図』が存在しており、この絵図から窺い知れる中世集落の全体像と考古学的に判明する中世集落像を比較対照させる分析が可能なフィールドであることである。考古学的分析のみによる中世集落の景観復元作業の限界を乗り越えるための一つの試行作業と位置づけて検討作業をすすめてきた。

ここで取り上げる「富田荘」は、現在の名古屋市中川区と海部郡大治町およびその周辺に比定されており、尾張平野の庄内川流域の沖積低地に立地する。寛治年間官符により四至が定められたとされ、康和5（1103）年に右大臣藤原忠実領として初めて荘名がみえる。当初本家・領家職は近衛家に相伝され、地頭職は承元5（1211）年より以前に北条義時に与えられ以降得宗家が継承し、弘安6（1283）年に円覚寺に寄進された。この富田荘を描いた『尾張国富田荘絵図』は神奈川県鎌倉市円覚寺に伝来す

る国重要文化財に指定された絵図である。紙本淡彩で縦100.5cm、横89.7cmを測り、『愛知県史第1巻』（1935）、『神奈川県史資料編二』（1973）、『新修名古屋市史第2巻』（1998）など多くの書籍に写真図版が掲載されている。この絵図や豊富な文書の存在により富田荘の歴史的研究や荘園絵図研究は著しく進んでおり、先行研究は多岐に及んでいる。当然のことながら富田荘の景観復元研究も上村喜久子（上村1986、上村1990など）、村岡幹生（村岡1998など）、安田喜憲（安田1970）らの考察があり、現地比定も大略がなされている。これらは地名や条里制地割の検討など歴史地理学的な分析手法が多用され、旧河川の復元を中心とした自然地形の復元研究も進められている。

一方、荘域内の集落景観の復元については、絵図に描かれた建物などの分析（板倉1952など）が見られるものの、現地の遺跡や遺構などの検討はほとんど行われていないに等しい状態であった。しかし、最近、名古屋市教育委員会の精力的な調査によって、その実像が明らかにされつつある。1980年代の遺跡分布調査で中川区など名古屋市内の荘域内の遺跡がいくつか確認され（愛知県教育委員会1986）、1990年代末からは発掘調査が数箇所で行われるようになった。これらの成果をまとめた報告書（名古屋市教育委員会2000など）では、遺跡の分布

※中・近世研究部会の構成員は、平成14年度が川井啓介・小澤一弘・松田 訓・池本正明・小嶋廣也・宇佐見守・鈴木正貴・鬼頭 剛・成瀬友弘・武部真木・蔭山誠一・鶴飼雅弘、平成15年度が小澤・松田・池本・小嶋・鈴木・鬼頭・武部・蔭山・鶴飼である。



ば位置するという見解が出されている。

こうした名古屋市側の調査の進展に比べ、海部郡域での研究状況は遅れていると言わざるを得ない。富田荘域内の海部郡下の遺跡はほとん

ど確認されていない状態であり、わずかに蔭山が採集資料を紹介しながら遺跡の存在をアピールしている（蔭山 2002）に過ぎない。

こうした状況の中、本部会でまず着手した作業は『富田荘絵図』に描かれた範囲の中で北部地域を中心に景観復元を目標として検討を進めた。分析の手法は次の3つである。

1、愛知県公文書館に保管されている明治17年作成の「地籍字分全図」（以下「地籍図」と呼ぶ）を用いて、その地名、地割と地目などに着目し、中世段階の自然地形や地割りなどを復元すること。

2、現地を踏査し、散布する表採遺物を採取する分布調査を行い、すでに知られる関連遺物も加えて考古学的な検討を行うこと。

3、同じく現地踏査の際に、現在も残っているわずかな起伏などの地形観察と水路や地割などの地誌的な検討を行い、景観復元の参考資料を採取すること。

最終的にはこうした作業を総合化して、まず集落の構成を決定付ける要素の一つである河川や自然堤防の復元を試み、これに地割や遺物分布状況などから集落の動態の概要を把握していきたい。（鈴木正貴）

2「尾張国富田荘」推定地域の考古学的調査

（1）現地踏査の実施

先学の諸研究を参考に、中世富田荘域に含まれると考えられる地域を平成15年2月～3月、10月～11月に実地踏査した。踏査した地点は、名古屋市中川区の戸田・春田から吉津3～4丁目（戸田川上流部と日吉神社周辺）・新家・千音寺と海部郡大治町の砂子（自性院周辺）・馬嶋・堀之内の各地区で、主に現在の集落区域とその周辺を踏査した。その結果、図2にみられる22箇所において古代～近世にかけての遺物を採集した（表1参照）。実地踏査した状況では、海部郡大治町砂子の自性院周辺では濃密に遺物が散在している状況がみられ、宅地周辺等に残る畑地や雑地を中心に遺物が表採できた。宅地化された現在の集落内（例えば海部郡大治町堀之内）、あるいはその他の目的で人工物が建設されている区域においては、遺物はほとんど表採できず、名古屋市中川区吉津3～4

丁目、同新家の地区では畑地において区画整理（表土の移動）が行われたと思われる地点では、細かい石材が耕作土中に多量に混ざり遺物が表採できなかったが、その周辺の石材があまり混ざらない畑地においては遺物が表採できた。今回の調査において遺物が採集できた地点とその周辺においては遺物の時期の遺跡が存在する可能性が高く、遺物が表採できなかった地点も遺跡の可能性が残る。（小嶋廣也・蔭山誠一）

（2）表採資料と関連資料

現地踏査により採集した資料について、表1と図2に示す。ただし採集資料は多くが小片で

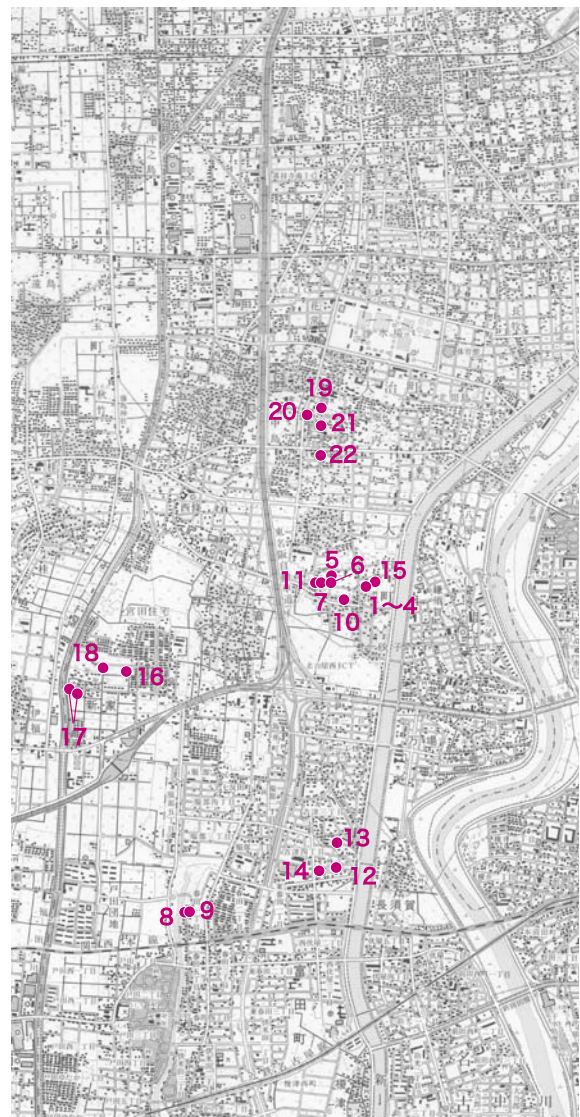


図2 表採遺物採取地（1：50,000）
国土地理院刊行「蟹江・津島」より

表1 表採遺物一覧

地点	地点名	地点詳細	採集遺物							江戸時代	その他・不明
			古代			中世					
			須恵器	灰釉陶器	土師器	灰釉系陶器	古瀬戸	土師器			
1	自性院北	海部郡大治町砂子		椀1	濃尾系	北部小皿1	折縁深皿1			1	
		千手堂自性院境内北			甕1	南部椀1					
2	自性院北	海部郡大治町砂子	3	椀5、瓶2	2	北部椀3	壺1	皿5	すり鉢1		
		千手堂自性院境内北		高台片1		南部椀8			皿1		
3	自性院北	海部郡大治町砂子	鉢1	瓶1	1			1	瓦質土器1		
		千手堂自性院境内北							不明2		
4	自性院北	海部郡大治町砂子		椀3		南部椀3	緑釉皿1	皿1			
		千手堂自性院境内北		瓶1		北部椀3					
						南部鉢1					
5	砂子堂地	稲荷社北北東畑地	蓋1	椀2		北部系統椀2					
6	砂子堂地	稲荷社北北東畑地	1	瓶1		北部椀4				土師器か1	
						南部皿2					
				椀2		南部壺					
						甕1					
7	砂子堂地	稲荷社境内北	甕1	椀3		北部椀1					
8	春田	太明神社		椀1		壺・甕1					
9	春田	太明神社				南部椀2		伊勢鍋1	1		
10	砂子堂地		甕1			椀か皿1					
11	砂子堂地	稲荷社堂地				南部椀2					
						鉢1					
12	吉津	吉津4日吉神社				北部椀1				軽石1	
						南部1					
13	吉津	吉津4日吉神社						鍋1			
14	吉津	吉津4日吉神社南西畑				椀1					
15	自性院北	アメニティ大治の北	杯1			北部椀1					
16	新家a	妙本寺東北東						伊勢鍋1			
		約200m畑地									
17	新家b	福田川東岸の畑地				南部椀1					
18	新家C	妙本寺北東					1			1	
		約150m畑地									
19	馬嶋2					南部椀1			椀1	形象埴輪1	
20	馬嶋1					南部椀2					
21	馬嶋3						大窯皿1				
22	馬嶋4					南部椀2					

あったため、実測可能な資料に乏しくまた時期についても詳細は不明である。

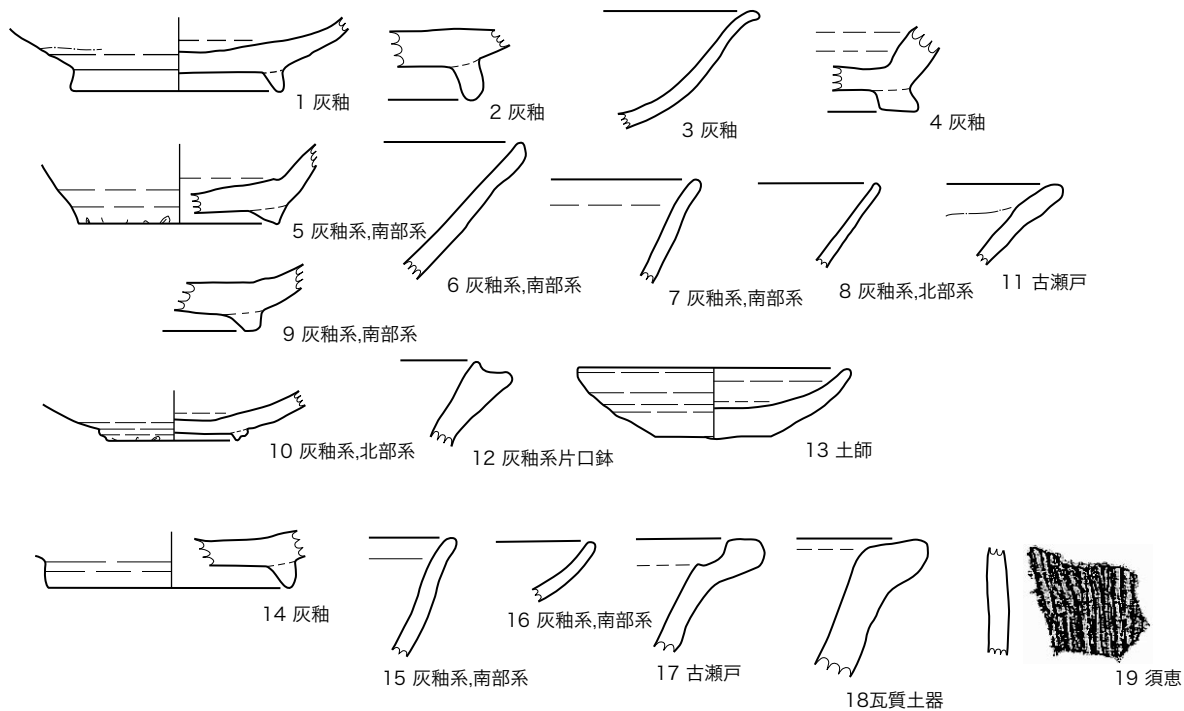
(地点1～4・15) 最も濃密な分布がみられた自性院周辺の地点である。まず須恵器、灰釉陶器、土師器甕など古代に遡る資料が他地点に比較して多いことが特徴の一つにあげられる。中世段階では、灰釉系陶器椀、皿、鉢、土師器、古瀬戸があり、灰釉系陶器では概ね12世紀後半～13世紀前半の時期とされる南部系の資料が13点、また13世紀後半～14世紀代とされる北部系の資料が8点といった割合となる。そして少量ながら古瀬戸と土師器皿が採

取されたのはこれらの地点に限定される。以上より一帯では比較的早い古代の段階から開発され、以降中世後半期まで継続した中心的な地域であったと推定される。

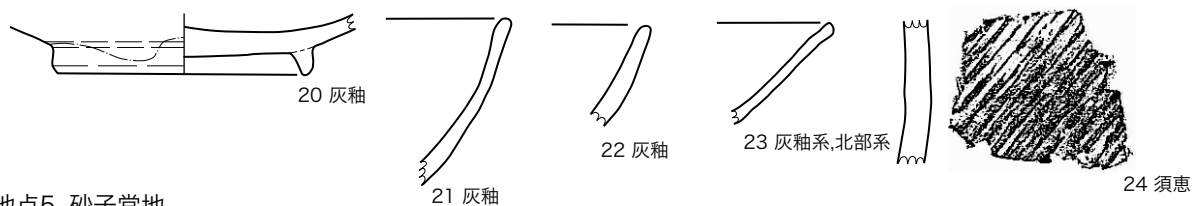
(地点5～7・11) 前述した自性院周辺のすぐ西側にあたる地点である。ここでも須恵器、灰釉陶器など古代に遡る資料が若干量含まれる。中世の灰釉系陶器では南部系資料に対する北部系資料の割合が高く、乏しい資料で断定するのは慎むべきであるが、中世段階の開発は前述の地域にやや遅れて進行したとも考えられる。

(地点16～18) 踏査した範囲では最も西

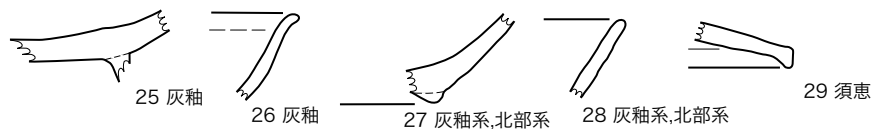
地点1～4. 自性院北



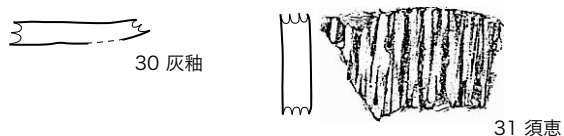
地点7. 砂子堂地



地点5. 砂子堂地

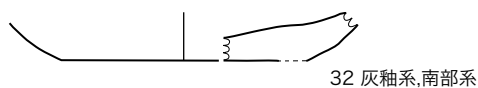


地点 10. 砂子堂地

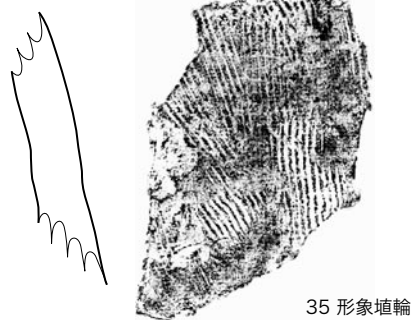


0 10cm

地点17. 新家



地点19. 馬島2



地点 9. 春田

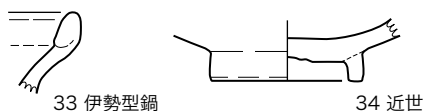


図3 表採遺物実測図(1:2)

側に位置する現在の福田川流路左岸にあたる字新家を含む地域である。古代の資料はみられず、中世前半期の資料と古瀬戸がある。

(地点 8・9) 踏査した範囲では最も南に位置する。現在の春田集落の西端の地点である。古代と中世前半期の資料がみられるが、遺物の分布は希薄である。

(地点 19～22) 踏査した範囲の最も北にあたる地域である。全体に資料の分布は希薄であるが、中世前期の資料が主体であり、特殊なものとして古墳時代の形象埴輪 1 点がある。

(地点 12～14) 新川の左岸にあたり、地点の東方では庄内川が蛇行し西側にせり出して流れる。中世前半期、後半期の資料があるが、遺物の分布はかなり希薄である。

関連資料として名古屋市教育委員会が調査を行った中川区千音寺遺跡出土資料を実見する機会を得た。踏査地点 16 の北東に広がる住宅建設に伴う調査であり、特に 1・2 次調査地点においてまとまった量の遺物が出土した。報告されているように若干量の須恵器がみられるほか、具体的に数値で示すことはできないが、灰釉系陶器では中世前半期に比重を置きつつ後半期にも継続がみられる。加えて青磁、白磁、土師器鍋や皿、常滑窯産に混じり渥美窯産と推定される壺甕類も少量含まれている。古代の灰釉陶器と中世の古瀬戸はほとんど見られない。(小澤一弘・池本正明・武部真木)

3 地籍図の分析

先学の研究においても絵図を現在の地図に具体的に復元する作業が行われてきた。復元作業の重要な手懸りが絵図に描かれた河道や道、地名などで、河道と道の位置が特定できれば絵図に描かれた建物等の位置についても推定が可能になる。このため地籍図に残された明治時代の土地利用を通して分かる地形等により、絵図に描かれた河道と道の位置とその道筋について検討する。今回は現在の地名・河道等から富田荘絵図に描かれた「成願寺」を中心とする地域の地籍図(明治 17 年)を土地利用の面から宅地(寺院と神社を含む)と畑地(藪と墓地を含む)、

水田(草生地を含む)の大きく 3 つに分類し、主な河道・用水、道・堤を入れたのが図 4 である。

(1) 地籍図にみられる微高地群と低地部

宅地が複数集まった集落は各村に 1 カ所～2 カ所存在し、八ツ屋村・北間島村・東條村・堀之内村・馬島村・中島村・西條村南部の集落が東西に並んで集まって分布しており、その他の村はその周囲に点在している。これらの集落部分は現在の集落範囲内にほぼ重なり、砂子村集落から続く万場村集落のように佐屋街道に沿って形成された集落もあり、村々は道によりつながっている。畑地はこれら宅地(集落)の周囲を取り囲んだり、宅地とやや混在して分布しており、さらにその周囲に水田が広がる。宅地と畑地は水田に比べて高燥な土地条件に営まれており、微高地を形成している。濃尾平野部における微高地のほとんどが河川堆積による河岸として形成されたものであり、湿地状の土地と考えられる水田域は河道部分と河道の後背湿地(あるいはそれらの痕跡)として現在まで残るものである。

この地籍図の解析を通じて、以下の 7 つの微高地群を認識することができた。

○微高地群 A：長牧村南部と八ツ屋村北東部から北間島南部・東條村北部・堀之内村中部を経て、馬島村北部・花常村南部・中島村北部を通り西條村南部に至る微高地群、微高地群 G を挟んで秋竹村東部から秋竹村集落に続く可能性がある。

○微高地群 B：鎌須賀村北部・三本木村北東部から砂子村北部・三本木村南部を経て、千音寺中北部(集落部分を含む)を通り千音寺村北西部に至る微高地群、微高地群 G と微高地群西端で重なり、さらに西の微高地群 F に続いていた可能性がある。

○微高地群 C：やや畑地と水田がモザイク状に散在する範囲であるが、万場村中央北村境付近から砂子村南中部を経て、万場村西部と千音寺南東端・南中部・新家村北西部を通り、千音寺村南西端と新家村集落に至る微高地群。微高地群 G を挟んで伊福村北東部に続く可能性がある。

○微高地群 D：鎌須賀村の北集落付近から万場村北東の飛地部分で、間に谷状の窪地を含む。微高地群 B と北側で重なる。

している微高地として、長牧村北部の集落や秋竹村南部の集落付近と万場村南村境付近の微高地がある。

また、これら微高地群から外れた低地部は大きく6群ある。

○低地部A：微高地群Aの北に分布する水田域で東は庄内川に隣接する長牧村南集落北部分より始まり、西は微高地群gにより途切れている。

○低地部B：微高地群Aと微高地群Bの間にある水田域で、東は庄内川に隣接する八ツ屋村南部から始まり、西は微高地群Gにより途切れている。

○低地部C：微高地群Bと微高地群Cの間にある水田域で、東は庄内川に隣接する万場村東部より始まり、西は微高地群Gにより途切れている。

○低地部D：鎌須賀村と砂子村の村境から鎌須賀村と万場村の村境付近に沿って分布する水田域で、北は微高地群Bの北には続かない。

○低地部E：微高地群Fの西に分布する水田域で、東は微高地群Gに隣接する桂村北部から始まり、南に折れて伊福村の南に続く。

○低地部F：微高地群Gの西に分布する水田域で、南側は秋竹村集落のある微高地により途切れている。

(2) 地籍図から河川堆積の痕跡を読み解く

次に絵図に描かれた河道を推定するため、先に抽出した微高地群と低地部の関係について、一つの河川堆積の痕跡と推定できる関係を抽出し、旧河道を推定する。まず、東西にのびる微高地群A～微高地群Cに対応する低地部は低地部A～低地部Cがあり、微高地群の規模と状態が類似する微高地群Aと微高地群B、2つの微高地群に挟まれた低地部Bが一つの大きな河川の堆積活動の痕跡(単位)と捉えることが可能である。同様に南北にのびる微高地群D～微高地群Gに対応する低地部は低地部D～低地部Fがあり、微高地群Dは地籍図にある庄内川右岸の自然堤防ともなっているが、この微高地群Dには方向が並行する微高地群Eと2つの微高地群に挟まれた低地部Dが一つの河川堆積の痕跡に捉えられる可能性が高い。また微高地群Fの北側と並行する秋竹村集落の微高地とこの間に挟まれた低地部Eも一つの河川堆積の痕跡と考えられ、図示していない地

籍図の西に南北にのびる微高地群も一連の河川堆積の痕跡と考えられる。一方で、微高地群Gは他に対応する微高地群や低地部がないが、微高地群Gの中には水田域(低地部)が微高地群に沿って存在することから、微高地群G自体が一つの河川堆積の痕跡と捉えられる。よって河道を推定できた4つ河川堆積の痕跡を各々旧河道A(微高地群A・B、低地部A)、旧河道B(微高地群D・E、低地部D)、旧河道C(微高地群F・秋竹村集落、低地部E)、旧河道D(微高地群G)とする。この4つの旧河道において、位置関係や推定できる河筋から旧河道Aと旧河道Cは旧河道Dを挟んで同一の河道の可能性が高い。その他の微高地群と低地部も河川の堆積により形成された可能性が高いが、具体的な河道の痕跡を推定できる関係を抽出できなかった。

(3) 絵図に描かれた河道

ここでは地籍図から読み解いた旧河道から、絵図に描かれた河道を推定する。絵図にみられる河道は北側の上流部において2条(河道ア・河道イ)、南側の下流部において3条(河道ア・河道ウ・河道エ)あり、絵図の「賀茂須賀」付近にて1条の河道(河道ア)に合流し、そこから分流するのが大きな特徴である。

明治17年の地籍図と中世の絵図との位置関係は、地籍図においてみられる河道の中で図4東端にあたる庄内川が絵図に描かれた河道アの河筋と類似し、また絵図に残る地名と地籍図に残る地名の対応関係が認識し易い。よって絵図に残る河道アを地籍図の庄内川と重ねると、絵図北側において河道アと河道イが合流する地点から河道アが蛇行する最初の屈曲部が図4の北東部にあたり、4番目の屈曲部が図4の南東部に相当する。この河道アの屈曲部をもとに南側にて河道アから河道ウが分流する地点を推定すると、地籍図において庄内川が最初に屈曲する八ツ屋村南部の地点が推定できる。先に地籍図において推定した旧河道Aと旧河道Cが、絵図の河道ウと位置と河筋が最も近い。また他に推定した旧河道では、旧河道Bは微高地群Bより北に続かないことから、中世より古い河道と思われ、旧河道Dは旧河道Aと旧河道Cを東西に分断するようにみられるので、中世以

後の比較的新しい河道の痕跡と考えられる。この想定が正しいかは今後の調査が必要であるが、旧河道Bと旧河道Dは絵図には描かれていない。

(4) 絵図に描かれた道

絵図における道の表現として、二本の線が並行して描かれているもの（堤状のものを含む、以下「二本線の道」）と一本の線で描かれているもの（以下「一本線の道」）があり、一本の線で描かれているものは条里や地域の境としても想定されている。まず二本の並行する線で描かれているものを考えると、地籍図で表現した範囲内に4本ある（道ア～道エ）。

道ア：絵図の「萱津宿」付近から逆「L」字状にはしる道。

道イ古庄内川の北の分流に橋をかけ、絵図の「成願寺」北側を西にはしり、「成願寺」の西側にて屈曲して南下する道。

道ウ・道エ：絵図の「新家里」の北東側にて「T」字路をつくる2本の道。

絵図の道ア～道エと地籍図にある旧道との関係では、地籍図において萱津から三本木村にいたるやや太線で描かれた道が絵図の道アの南下する部分と道アから分かれ河道ウを渡る道イと道筋が類似する。また、地籍図にある旧道が微高地上にある村々をつないでいるように道が村々をつなぐという性格を重視し、絵図にある道も同様な性格をもつものと考え、地籍図にある旧道の道筋と微高地の分布を手懸りに絵図に描かれた道ア～道エの位置を推定する。道アは地籍図の五条川右岸から続く微高地を萱津付近から南下して八ツ谷村北部付近にて西に曲がり微高地群aの上を通り西に至るものと考えられ、道イは地籍図の東條村集落東側から南下して三本木村北東部の微高地付近で西に曲がり、三本木村集落を経て、砂子村と千音寺村の村境に続く位置を通るものと推定したい。また道ウ・道エは地籍図において新家村東部を南北に流れる用水路付近の微高地（道ウ）と東西にのびる新家村集落の上（道エ）を通過してT字路をなしていたものと推定しておきたい。

次に道の可能性がある一本の線は絵図の「成

願寺」南の東西の線（道オ）と道アの西にのびる部分の北に並行してはしる東西の線（道カ）がある。道オは地籍図の砂子村と万場村の村境と対応しており、さらに千音寺村集落の南を経て、新家村と千音寺村の村境に続く。道カは道アと同様に地籍図の微高地群Aを通るものと考えられ、地形的に条里等の土地区画に伴う線と考えるよりは道アから分かれる枝道と考える方が妥当である。このように考えると微高地群aでは北間島村の南村境に沿った部分から堀之内村集落の北側を経て花常村南端にかけて微高地に並行して東西にのびる水田域が存在し、微高地群Aを南北に区分することができる。よってこの水田域を挟んだ南側微高地を道アが通り、萱津道の枝道と推定される道カを北側の微高地を通るものと考えられないか。そしてこの谷状になる水田域が閉じる西條村集落北部にて2本の道は再び合流し、西にのびるものと考えたい。

(5) 絵図における地名の位置

絵図に描かれた河道と道の位置をこのように推定すると絵図の「成願寺」は地籍図の砂子村北部の集落を中心とする地域に、「秀時」は万場村に、「千音寺」は千音寺村集落に、「新家里」に描かれた建物群は新家村集落から東側南北にのびる微高地に、「草壁里」は千音寺村南部の水田域に各々の位置が特定できるであろう。（蔭山誠一）

4 地籍図をもとにした微地形分類の地質学的検討

明治17年発行の地籍図をもちいて海部郡大治町長牧、名古屋市中川区万場、海部郡七宝町伊福、同郡大治町西條で囲まれる東西約2.7km、南北約3.3kmの範囲を、土地利用の差をもとに微地形を分類した。その結果、宅地と畑地の分布状況から周囲に比べて相対的に標高の高いと考えられる微高地を微高地群A～Gの7つに、微高地群以外の相対的に標高の低いところを低地部A～Fの6つにわけた。

ところで、名古屋市南部とその周辺地域に関する地質学あるいは自然地理学的研究には井関(1982a, 1982b)、中井ほか(1982)、安田(1971)がある。それらのうち井関(1982a, 1982b)、中井ほか(1982)は地質学的に更新統

最上部から完新統までの $10^3 \sim 4$ 年の地層をあつかっており、本論でのべる時間スケールと比べてあまりにも古い。安田 (1971) は庄内川下流域において、航空写真判読と古文書の記載を参考に歴史時代の河道変遷と微地形を分類した。参考になるのは安田 (1971) しかないわけである。ここでは本論で区分した微高地と低地部の分布状況を安田 (1971) と比較することで、既知の部分と今回新たに確認できたことを整理してみる。なお、安田 (1971) の微地形分類図では三角州を陸化の有無により分け、陸化しているところを三角州上位面、陸化していないところを三角州下位面とした。この区分に従うと、本論で対象とした地域はその大部分が三角州下位面となる。陸化していない水中に没した地域となり。明らかに矛盾してしまう。また、地質学では三角州を上位面、下位面とに分けるが、いっばんに淡水河川の卓越する環境を上部三角州（正確には上部デルタ平原）、潮汐の影響をこうむる環境を下部三角州（下部デルタ平原）とに分け、陸化（あるいは離水）の有無では区分しない (Coleman and Prior, 1980)。加えて、安田 (1971) では庄内川や戸田川の河口に、東西方向に帯状にのびる後背湿地が描かれている。自然堤防に分類された周囲には後背湿地がほとんどみられないにも関わらず、海側に後背湿地が唐突に出現している。おそらく、河口の干潟環境に生じる塩性湿地として表現したかったのかもしれないが、不明である。以上のような理由で、安田 (1971) の微地形分類図の主に河道跡とその周囲の自然堤防、後背湿地のみに注目して整理を進めることにする。

整理にあたり、本論の地籍図と安田 (1971) の地形分類図との位置を正確に決定する必要がある。そこで基準となるのが庄内川である。現在の庄内川は、西春日井郡西枇杷島町から海部郡大治町長牧にいたる区間で流路はほぼ直線的である。ところが、海部郡大治町長牧から名古屋市中川区万場の区間では明瞭に蛇行するようになる。蛇行部の地形について、河道の両岸、堤防ではさまれた部分がそれぞれ攻撃斜面と滑走斜面とにわけられる。河岸の平面形状が凹型になっているところを攻撃斜面、凸型で河道に向かってゆるく傾斜するところを滑走斜面と

よぶ。庄内川の蛇行部は、伊勢湾にそそぐ河口から約 9.1km の大治町鎌須賀で攻撃斜面、名古屋市中村区稲葉町側で滑走斜面、河口から約 7.6km で流路西側の名古屋市中村区岩塚付近（万場大橋地点）で攻撃斜面、流路東側に滑走斜面、約 6.6km で流路西側の名古屋市中川区万場で攻撃斜面、同市中村区八社で滑走斜面がみられる。このように、蛇行軸に沿う直線距離約 1.8km の区間に 3 地点の蛇行部が存在する。本論であつかった地籍図の東端には南北方向に屈曲部がみられる。この屈曲部は、現在の大治町鎌須賀から万場大橋にかけてみられる庄内川蛇行部の西側（右岸側）に対応する。この対応部分と新川の位置を合わせて、安田 (1971) が作成した地形分類図に投影してみた。

安田 (1971) では、庄内川は大治町鎌須賀で分岐し、西側方向へ向かう河道跡が推定されている。この河道跡は海部郡大治町三本木、同町西條を通り、海部郡七宝町秋竹の秋竹小学校で南へ方向を変え、同町川部の東側約 300m を通り、同町鷹居でさらに 2 本に分岐する。分岐した西側は七宝町鷹居で蟹江川と津島七宝名古屋線との交点にある鷹居橋から、津島市金柳町の東方、蟹江町の東名阪自動車道蟹江インターチェンジ、同町北新田にいたる。東側は七宝町伊福の伊福小学校から、同町鯉橋を経て蟹江町須成にいたる。上述の河道跡は、本論の微高地群 A・B・F とに囲まれる低地部 B・E の大治町三本木から七宝町伊福までにあたる。また、上述の安田 (1971) の河道跡には大治町西條北方から合流してくる河道跡があり、その西側には北東 - 南西方向に長さ約 500m の自然堤防がみられる。合流する河道跡は本論の低地部 F の一部に、自然堤防は微高地群 G の北部に対応する。上述した河道跡の南側には、大治町砂子から名古屋市中川区富田町北部、大治町西條南端にいたる（現在の西條中川線を通り七宝町伊福の約 500m 北まで）明瞭な自然堤防が分類されており（安田, 1971）、これは微高地群 B に対応する。また、大治町八ツ屋から名古屋市中川区万場にかかる庄内川西側（右岸側）にみられる自然堤防（安田, 1971）は本論の微高地群 A の東側部分に、名古屋市中川区万場にみられる自然堤防（安田, 1971）は

微高地群 E に、七宝町伊福の北方でみられる自然堤防（安田，1971）は微高地群 f にそれぞれ対応する。さらに低地部 A は後背湿地（安田，1971）に、低地部 C は三角州上位面（安田，1971）にあたっている。

以上のように、本論の微高地群（A・B・E・F・G）と低地部（A・B・C・E・F）が安田（1971）の河道跡や自然堤防・後背湿地とに対応関係が認められる。一方で、安田（1971）には認められていないものがある。微高地群 A の西側部分（東條・堀之内・馬島・中島にかけて）や、鎌須賀において北西 - 南東方向にのびる微高地群 D と低地部 D、そして微高地群 C である。なお、微高地群 C は水田面積に対する宅地・畑地面積比がほかの微高地群と比べてきわめて小さい。微高地群と呼称するにはいささか抵抗がある。微高地群 D と低地部 D とのセットは、現在の新川と庄内川とに挟まれてみられ、北西 - 南東方向にのびた庄内川とをつなぐ分岐流路跡（低地部 D）および自然堤防（微高地群 D）と考えられる。ところで、村岡（1998）

は「新修名古屋市史 第二巻」（新修名古屋市史編集委員会，1998）の中で、文献史学的な見地から「富田荘絵図」の地域について考察をおこなっており、航空写真判読をもとにして庄内川と新川とに挟まれた本論と同じ地点に河道跡を推定した。低地部 D がそれにあたり、安田（1971）の分類にはみられない河道跡が、航空写真判読の結果（村岡，1998）とともに明治 17 年の地籍図による微地形分類からも指摘できたことになる。

加えて、微高地群 G は本論の微地形分類範囲を南北方向にのび、安田（1971）の分類した大治町鎌須賀から西側へ分岐する河道跡を切っており、明らかに時代の新しい河道跡が推定でき、その自然堤防として微高地群 G が存在することを示唆する。（鬼頭 剛）

5 「成願寺」付近の復元

第 3 章では地籍図をもとに、絵図に描かれた河道・道・及び地名を特定した。中でも成願寺

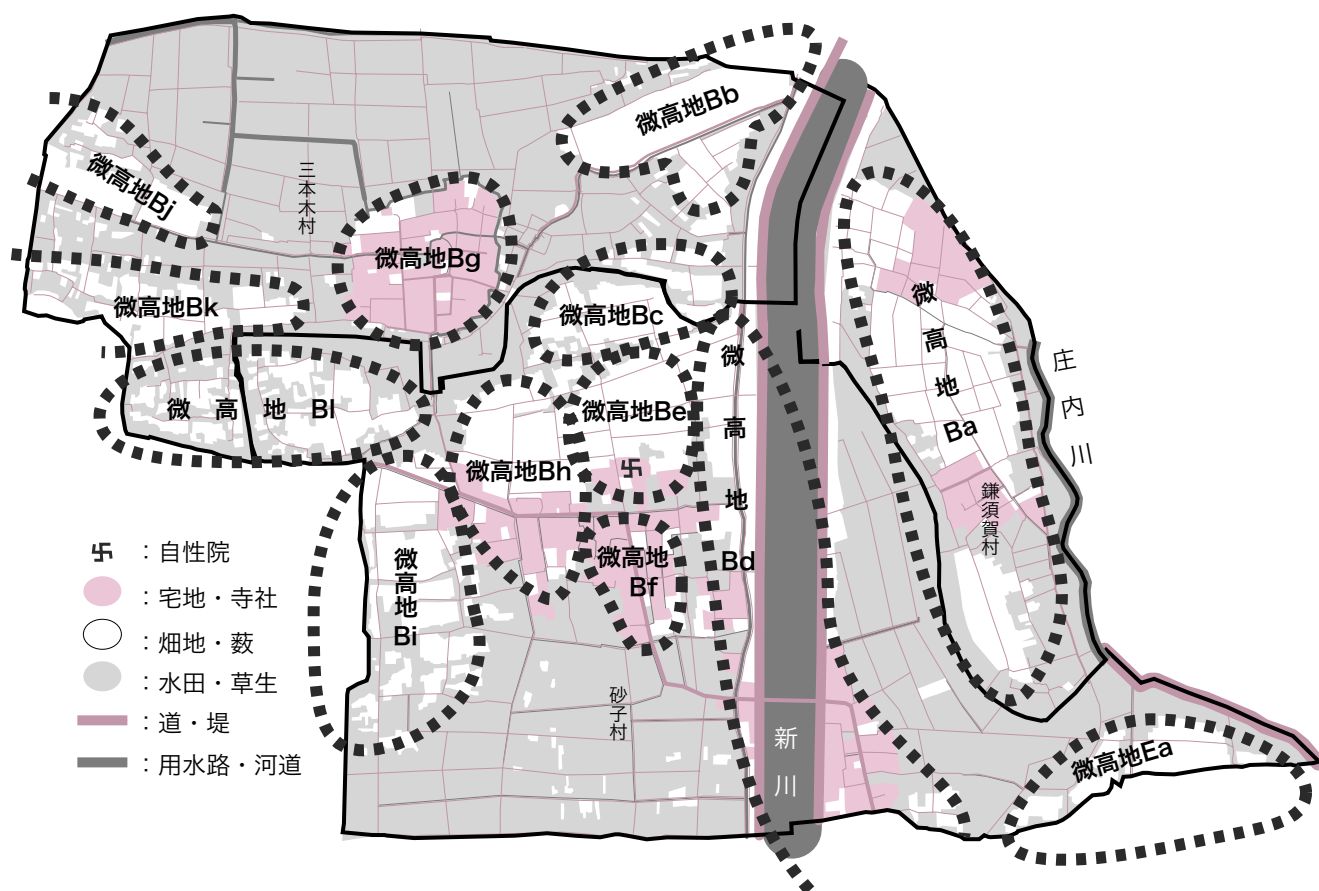


図5 砂子村地区地籍図（約 14,150 分の 1）

が微高地群Bのうち、砂子村北部の集落を中心とする地域に特定できることが明らかになったことから、本章では成願寺付近の推定を試みる。まず微高地群Bを細分して検討し、絵図に描かれた建物の分布を確認したうえで、成願寺が微高地のどの場所に該当するかを推定する。

(1) 微高地の分析

図5は、砂子村及び三本木村・鎌須賀村地籍図を合成したものである。この地域では微高地群B・微高地群D・微高地群Eが該当するが、分析の中心は微高地群Bになる。微高地群Bを詳細に検討した結果、微高地BaからBiを析出することができた。

微高地Ba：鎌須賀村の北部から南南東に帯状に分布する。その南に微高地群Dが続く。

微高地Bb：三本木村の北東部にY字状に分布する。微高地は南西方向へ帯状に展開して微高地Bgへ続くものと、南方向へ伸びて微高地Bc・Bdに連なるものがある。

微高地Bc：三本木村・砂子村の境で東西に分布するが、一部は東西に伸びる水田の区画で途切れる。北で微高地Bbと接し、南で微高地Bd・Beと一部が接する。

微高地Bd：北で微高地Bcと重複し、南南東方向へ展開して微高地群Eに至る。ただし新川開削の影響を受け、一部は消滅している。

微高地Be：砂子村の中央に分布する。北で微高地Bcと接し、微高地Bd・Bhと東西で重複する。比較的安定した微高地である。

微高地Bf：微高地Beの南に分布し、西で微高地Bhと重複する。佐屋街道が自性院から南へ屈曲する部分が中心となる。

微高地Bg：三本木村中央で塊状に分布する。孤立して見えるが、西に展開する微高地Bj・Bkと成因過程が同一の可能性がある。

微高地Bh：砂子村中央やや西より、微高地Be・Bf・Biと重複して南北に分布する。比較的安定しているが、佐屋街道より南は細長くなる。

微高地Bi：砂子村・千音寺村境に分布し南北に展開するが、南側では畑の分布がモザイク状となる。東で微高地Bhと重複し、北で微高地Bkと接する。

微高地Bj：三本木村西部、畑が北西方向にモザ

イク状に分布する。南で微高地Bkと接する。

微高地Bk：三本木村西部に東西方向でモザイク状に分布する。北で微高地Bjに、南で微高地Biに接する。

微高地Bl：砂子村西部から三本木村南西部にかけて東西にモザイク状に分布する。北で微高地Bkに、南で微高地Biに接する。

なお、このほかに砂子村南東部から万場村北西部にかけて塊状に分布する微高地Eaがある。

(2) 「富田庄絵図」における建物の分類と位置の比定

次に「富田庄絵図」に描かれた成願寺及びその周辺に分布する建物を分類し、微高地上における位置を推定する。絵図に見える成願寺付近は、東は河道ア、西及び北は道イ、南は道オで囲われた地域を指し、5種類の建物を確認することができる。なかでも成願寺を構成と思われる建物は、本堂(①)、塔(②)、門(③)の3種類である。ついで成願寺の東には、彩色された2棟の二層もしくは庇付建物(④a、④b)と2棟の平屋建物(⑤b)が分布する。このほかには成願寺の西に絵図の右上から左下にかけて平屋建物6棟がみられ(⑤a)、成願寺右下の道オの北側にも平屋建物1棟(⑤c)がある。

当時の集落や寺院は、先に析出した微高地の分布と一致すると考えることができるので、建物の分布を地籍図に反映させる作業に移る。まず⑤aは南西隅の3棟と北よりの3棟の2群に分かれ、道イが微高地Bi、Bgを経て微高地Bbを通ることを根拠に、微高地Biの東部およびBhの北部に分布していたと考えることができる。また⑤bは微高地Bdに、⑤cは微高地Eaにそれぞれ比定が可能である。次に④a・④bの位置は、⑤bとの間に空白があり距離を想定できること、また建物が左上から右下に配置されていることから、微高地Baに比定できる。こうして成願寺の寺域は微高地Be・Bf・Bhに絞られる。

(3) 成願寺の建物の配置

最後に建物①・②・③の位置を推定するが、景観復元のためには絵図が描かれた時期を確認する必要がある。そのために参考とするの



図6 砂子村自性院周辺の地籍図(約1:5,000)

が、現在も大治町砂子に所在し、成願寺の法燈を継ぐといわれる自性院に伝わる、「自性院縁起」の記述である。を参考にする。この縁起は上村喜久子の研究により明応4(1495)年までに成立していたと考えられ(上村1992)、成願寺の歴史をたどる上で貴重な史料として利用されている。同縁起によれば成願寺は延慶2(1309)年、昼夜三日にわたる「大風逆浪」により堂塔がごとごとく破壊されたとある。また嘉暦2(1327)年に本堂を南面に改めて再建したとする記事があり、絵図に描かれた堂塔は同年以降に再建された姿を示していると考えられる。なお村岡幹生氏は『新修名古屋市史』第2巻(村岡1998)において、絵図の成立契機

を14世紀半ばの尾張国守護土岐氏一族の進出においており、注目される。したがって絵図に描かれた建物の立地は前項の検討結果とあわせると、絵図の表現にデフォルメが想定されるものの、14世紀半ばの状況を反映している可能性が高い。また同縁起に応永23(1416)年に焼亡したとする記事があることから、伽藍は15世紀はじめまで存続した可能性がある。

以上の点を確認した上で寺域の推定を進めるが、寺域は絵図表現におけるデフォルメの程度により、2つの可能性を考えることができる。絵図のデフォルメが小さい場合は大規模な伽藍配置となるため、建物の立地は窪地の制約を受けるものの、寺域は窪地を含んだ微高地上に立地

することが想定される。したがって前項の分析結果から、①は微高地B eの西から微高地B hの東にかけて、②は微高地B hの南側、③は微高地B fにそれぞれ立地することが考えられる。

一方絵図のデフォルメが大きい場合、立地条件をより限定する必要がある。甚目寺や明眼院など周辺寺院の規模は1辺が100 mを超えるが、200 mを超えるものはない。したがって成願寺もほぼ同じ規模を想定すると考えると、微高地上で立地可能な範囲は限られる。そこで地籍図から微高地B e・B f・B hとその周辺の連続する水田の範囲から窪地の分布を検討すると、次のように析出することができた。

窪地a：十二所神社の東、南北方向に幅20 mで分布する。またその西にある水田1区画も成因が同一の可能性ある。

窪地b：自性院の北の水田2区画にあたる。

窪地c：自性院の南から西にかけて南北に分布する3本の水田と、幅20 m前後で東西に分布する水田で構成される。なお窪地a・bを含め、ひとつのまとまりとして捉えることが可能である。

窪地d：十二所神社の南、南北方向に幅30 mで分布する水田と、その東に分布する水田で構成される。

窪地e：自性院の北西、東西方向に分布する。また一部は微高地B hに約4 mの幅で細長く食い込む。

窪地f：寺院敷地の南、南北方向に分布する。微高地B f・B hの間に相当する。

窪地g：稻荷社の北西、微高地B h・B i・B lの間に分布する。

窪地h：稻荷社の南、微高地B h・B iの間に南北に分布する。

これらのうち、窪地a・b・c・eは微高地群Bに伴い、窪地a・dは微高地群Eに伴い形成されたものと捉えられるが、窪地a・cは一定の幅で細長く見られることから、人為的に掘削された可能性が残る。寺域は東を窪地a・cによって、北を窪地eによって制約されるため、微高地B e・B hに絞り込むことができる。よって立地は窪地を含まない安定した微高地に立地する。これらの点を考慮すると、①・②・③は現在の自性院より北西に分布することにな

り、微高地B eの西から微高地B hの東にかけて立地すると考えられる。(鵜飼雅弘)

6 まとめ

中・近世研究部会において、尾張国富田荘を素材として取り上げ、中世集落研究の手法を模索し、検討を行ってきた。本研究部会では、考古学一分野からのアプローチにこだわらず、多分野からの視点を用いた総合的研究を目指したつもりである。

今回のプロジェクトを始めるにあたり、もっともこだわり、目指したのは景観復元であった。ある地点、時期を目的とした景観復元は、研究分野を越えて様々な手法で行われつつある。しかし、どの研究をとってみても、単一な手法では不可能であることが指摘されながらも、最適な手法が見つからない中で、それぞれが試行錯誤を繰り返しているのが現状であろう。ここでは、文献史学、歴史・自然地理学などの先行研究に助けられつつ、富田荘域の中で絵図にみられる「成願寺」を中心とした地域に絞り、分析を進めてきた。

まず現地踏査においては、地点による採集資料の粗密、資料の製作時期、産地等を調べ、これを比較することによって地点の性格を推測した。その結果、現地踏査という限られた手法の中では、自性院周辺の地点において、もっとも濃密な遺物分布が確認され、古代の早い段階から中世後半期まで、継続して営まれた中心的地域であることが推測できた。

次に地籍図の分析においては、明治期における土地利用の実態から微高地と低地を割り出し、7微高地群と6低地部を認識した。これらの相対関係から河川堆積の痕跡を抽出し、4条の旧河道痕跡を推定した。この推定した旧河道痕跡を、絵図に描かれた河道と比較することにより、4条の中で2条は庄内川とその支流、残りの2条は復元を目的とした中世よりも古い河道と、中世以降の比較的新しい河道と推定した。さらに、地籍図に表記された旧道の道筋と、微高地の分布を手がかりとして、絵図に描かれた道の位置を推定した。このことによって、絵図に描かれた「成願寺」の位置を、砂子村北部

の集落と比定し、この周辺に描かれた地名についても、位置を特定するに至った。

これらの分析に加えて、地籍図をもとにした地質学的分析を行い、微地形の分類を行った結果、先行研究(安田 1971)の矛盾点をあぶり出しつつ、本稿で分析した微地形の対応関係を補強する結果が得られた。

以上の結果により、富田荘絵図の中心部分、「成願寺」のある現・大治町域を中心に、絵図の地点をおおまかに特定することができた。さらに、絵図の表現においてデフォルメの可能性を考え、周辺寺院の規模を考慮し、地籍図にみられる寺院(自性院)の南側と東側を巡る水田域(窪地)の存在に着目して、「成願寺」寺域の推定を行うことができたわけである。

人々が生存する場所には、どの時代においても整備状況に差はあるものの、地形に左右された道が存在する。そして、この道に導かれるように、その時々生活要因によって住居が築かれ、それぞれの生活圏が交錯することとなる。富田荘が立地した沖積低地では、古代から中世にかけて、公家領から寄進地系の寺領荘園へと

伝領される中で、そこに生活の場を定めた人々の痕跡が、文献資料、現地踏査、発掘調査結果の事例からも明瞭である。微地形が複雑に変化する自然環境下で、人々は生業を営み、この地での生活誌を刻み続けたわけである。この事実を痕跡だけに放置せず、当時の景観復元まで分析・調査することによって、単一分野でのアプローチからは成し得ない歴史研究が、初めて可能となるであろう。

今回の分析結果からは、今まで見過ごされがちであった集落遺跡としての富田荘を、部分的に意義付けることができた。現代に残されている資料を分析素材として、さらなる具体的な解明を行うためには、当該期の中心的エリアを特定し、この部分における発掘調査事例を追加することが不可欠である。そのためには、当該期の集落がどの地点であったのか、比定の精度を高め、埋蔵文化財調査の対象となりうる根拠を構築してゆく必要があるであろう。当研究部会での試みが、こうした根拠への一助となれば幸いである。(松田 訓)

参考文献

- 愛知県（1935）『愛知縣史第1巻』
- 愛知県教育委員会（1986）『愛知県遺跡分布地図（I）尾張地区』
- 板倉勝高（1952）「尾張国富田庄を例とする日本庄園の村落構造」『東北地理 5 卷 1 号』
- 上村喜久子（1986）「絵図にみる富田庄の開発と形成」『名古屋短期大学研究紀要 24』
- 上村喜久子（1990）「富田庄」『講座日本庄園史 5 東北・関東・東海地方の庄園』
- 上村喜久子（1992）「『自性院縁起』について」名古屋短期大学研究紀要第 30 号
- 神奈川県（1973）『神奈川県史資料編二』
- 蔭山誠一（2002）「県内遺構遺物集成 Vol22 発掘！尾張国富田庄」『まいぶん愛知 no69』
- 名古屋市（1998）『新修名古屋市史第2巻』
- 名古屋市教育委員会（2000）『埋蔵文化財発掘調査報告書 35 千音寺遺跡（第1・2次）』
- 村岡幹生（1998）「第四章 庄園・公領制下の人々の生活」『新修名古屋市史第2巻』
- 安田喜憲（1970）「尾張国富田庄の歴史地理学的研究」『立命館文学 303』
- Coleman, J. M. and Prior, D. B., 1980, Deltaic sand bodies, Amer. Assoc. Petrol. Geol. Continuing Education Course Note, No.15, 171p.
- 井関弘太郎・森山昭雄・藤井昭二, 1982a, 名古屋港周辺の完新統とその基底地形, 第四紀研究, 21, 3, 145-151.
- 井関弘太郎・藤井昭二・藤 則雄, 1982b, 名古屋港周辺資料に基づく完新世の海水準変動, 第四紀研究, 21, 3, 179-182.
- 村岡幹生, 1998, 第四章 庄園・公領制下の人々の生活, 新修名古屋市史 第二巻, 名古屋市, 195-292.
- 中井信之・太田友子・藤澤 寛・吉田正夫, 1982, 堆積物コアの炭素同位体比, C/N 比および FeS₂ 含有量からみた名古屋港周辺の古気候, 古海水準変動, 第四紀研究, 21, 3, 169-177.
- 新修名古屋市史編集委員会, 1998, 新修名古屋市史 第二巻, 名古屋市, 829p.
- 安田喜憲, 1971, 濃尾平野庄内川デルタにおける歴史時代の地形変化, 東北地理, 23-1, 29-36.